栗林公園の歴史

栗林公園はもともと、讃岐国（現在の香川県）を治めた生駒家からその土地を継承した高松藩の領主、松平家の邸宅の一部でした。1642 年に最初に建設された庭園は、1868 年まで 200 年以上にわたって松平家によって維持され楽しまれてきました。1868 年の明治維新に続いて、幕府（武家主導の政府）が支配した幕藩体制は西洋式の中央集権政府に置き換えられ、松平家は領主としての地位を失いました。 栗林公園は 1875 年に一般公開されました。高松のシンボルであり、市内で最も人気のある名所の 1 つである栗林公園は、江戸時代（1603 年～1867 年）から続く庭園のうち、日本で最も保存状態の良い庭園の 1 つとして認められています。

江戸時代に高位の武士に人気があった回遊式庭園であり、丁寧に構成された一連の庭園を、歩きながら眺めることができるのが特徴です。栗林公園で見られる景色の多くは、池や小さな丘に焦点を当てています。庭には約 1,400 本の松の木があり、芸術的に配置された岩が敷地内に点在しています。もう一つの特徴は、庭の外の自然の特徴を生かして広がりを感じさせる「借景」という庭のデザイン技法の使用です。栗林公園では、西の紫雲山が背景となり、ある角度から見ると紫雲山は庭にそびえ立つように見えます。そのような眺めのひとつを飛来峰から楽しめます。
栗林公園は、元来の大名庭園である南庭園と、明治時代（1868 年～1912 年）に建てられた北庭園で構成されています。広大な敷地全体を見学するのに最大 2 時間かかることがあります。訪問者は季節ごとにさまざまな景色を楽しめます。特に春の桜や秋の紅葉は、多くの来場者を魅了します。